

Shall We Juggle?

日本ジャグリング協会オフィシャルマガジン

No.
67



JJF2025松本特集
Japan Juggling Festival 2025

Shall We Juggle? No.67 目次

実行委員長コメント

予選講評・決勝講評

チャンピオンシップ入賞者コメント

ロゴデザイン紹介

ゲストインタビュー1：Onni Toivonen

ゲストインタビュー2：工藤正景

ゲストインタビュー3：くるくるシルクDX + 信州ユースサーカス

ワークショップ一覧

イベント紹介

SWJ編集部について

編集後記・奥付

巻頭言 「本州のまんなかから」

JJF2025は松本で行われ、初めて長野県での開催となりました。中部地方での開催自体も12年ぶりとなります。国内外から多くのジャグラーが参加し、大きな盛り上がりを見せました。

今年は、昨年よりもさらに開催地とのつながりを重視している印象を受けました。劇場チケットの長野県民割引や、松本名物の湧水スポットを巡る企画、信州ユースサーカスメンバーのゲストステージ出演など、"松本らしさ"が満点な内容でした。松本駅の「歓迎 ジャパンジャグリングフェスティバル」の垂れ幕掲示も、ちょっとした話題になりましたね。

また、SNSでの広報も例年よりパワーアップしていました。実行委員の広報チームでは、海外への参加者向けにInstagramで動画を活用した投稿を多く実施していました。SWJ編集部では、現地で撮影した写真を(ほぼ)リアルタイムで掲載する、実況投稿を実施していました。JJFに参加している人も、参加できなかった人も、JJFの空気感を味わえたのではないかと思います。

本SWJ67号でも、様々な視点からJJF2025の内容をお伝えできるよう企画・編集しましたので、お楽しみいただければ幸いです。

—JJFを楽しみすぎたあまり、3日目にインフルエンザAに罹患しました。
SWJ編集長 まゆこ





JJF2025松本特集



Japan Juggling Festival 2025(JJF2025) 開催概要

開催日時：2025年9月13日(土)～15日(月)

主催：NPO法人 日本ジャグリング協会

協賛：

会場：エア・ウォーターアリーナ松本、キッセイ文化ホール

後援：長野県、松本市、松本観光コンベンション協会



花田充、中部拓斗

JJF2025 実行委員長コメント 柏倉優大

はじめまして。Japan Juggling Festival 2025 in Matsumoto (以下、JJF2025) の実行委員長を務めました、柏倉優大と申します。多くの方にとって本当に「はじめまして」だと思いますので、まずは自己紹介をさせていただきます。

私は大学進学を機に東京から長野県へ移り住み、信州大学ジャグリングサークル「サイクロイド」でボーイを始めました。ジャグリングを始めてからは9年になりますが、大学卒業と同時にCOVID-19の流行が重なり、就職してからおよそ3年間はジャグリングから離れて過ごしていました。さらに、これまでJJFのような大規模イベントの運営に携わった経験もない、ただの一般医療従事者です。

そんな、やや謎めいた存在である私ですが、今回JJF2025の準備期間に考えていたことや、実行委員会の裏側についてお話しできればと思います。そして、あわよくば読者の皆さんがJJFの運営に興味を持ってくださいなと思います。

「つながり」を意識した JJF2025

私にとって今回のJJF2025は、「つながり」を強く意識したイベントでした。

大きく分けて二つの「つながり」についてご紹介したいと思います。ひとつは「長野県とジャグリング界隈とのつながり」もうひとつは「ジャグリングを通じた人と人とのつながり」です。

長野県とジャグリング界隈のつながり

これはとても個人的な話になりますが、JJF2025には、私自身にとってお世話になったジャグリング界隈と長野県への「恩返し」の気持ちが入っていました。

その恩返しを言葉にするなら、ジャグラーの皆さんにはJJFをきっかけに長野県を観光してもらい、その魅力を感じてほしい。そして長野県の方々には、「ジャグリングという面白い文化があるんだ!」と知ってもらいたい——そんな思いとともに、イベントの準備を進めてきました。

特に今回は、松本観光コンベンション協会さんに多大なお力添えをいただき、駅の横断幕や観光パンフレットなどを制作、提供してくださいました。参加者の皆さんから改札を出てすぐに歓迎の文字を目にし、ワクワクしてくださっていたら何よりです。

また、本部チームが企画した湧水企画や、イベントチームによる地域色を取り入れたノベルティ制作、そして長野県を拠点に活動されている高坂祥さんにグッズデザインを担当していただいたことも地域色アピールにつながったと感じています。

さらに、長野県におけるジャグリング文化の普及という面でも新たな試みを行いました。JJFのチラシを新たに制作して県内の施設へ配布したほか、CS・GS観覧券に「長野県民割チケット」を新設しました。これは、JJF2025のコンセプトの一つである「まだジャグリングに触れたことのない方々への普及の場をつくる」を体現する取り組みです。

ジャグラーの皆さんの中には、普段ジャグリングに馴染みのない方から「ジャグリングって大道芸?」と聞かせる経験が一度はあるのではないのでしょうか。そういった方々にとって、ジャグリングを舞台上で観ることは全く新しい文化体験です。

今回のJJFが、そんな界隈外へのアウトリーチのきっかけになれたのなら、これ以上の喜びはありません。

ジャグリングを通じた人と人とのつながり

まず第一に、今回のJJFは、私一人の力では決して実現することはできませんでした。本当に多くの方々のご協力のおかげで、こうして形にすることができました。

実は、JJF2025の始まりは2023年に開催された愛知ジャグリング協会さん主催であるAichi Flow Artist Competitionにさかのぼります。先ほど少し触れましたが、私自身はCOVID-19の流行をきっかけに一度ジャグリングから離れていました。同世代の友人が大会を主催してくれたことで、再びジャグリングをする「場」と出会い、戻ってくることができたと感じています。そして今度は、自分がその場をつくる側になりたいと思い、愛知ジャグリング協会さんを通じて日本ジャグリング協会さんに「ぜひ松本でJJFをやませんか?」とお声がけさせていただき、JJF2025の開催に至りました。本当にありがとうございました。

私は、ジャグリング文化の大きな魅力の一つは「懐の深さ」にあると考えています。トップレベルで活躍する人から趣味で嗜む人がいて、それを観て楽しむ人がいて、道具をつくる人がいて、文章を書く人がいる。ジャグリングという一つの大きな流れの中で、さまざまな人がそれぞれの関わり方で一つのカルチャーを築いているのです。

少し話が変わりますが、私は最近「健康ジャグリング」という言葉をよく使っています。これは、健康的な形でジャグリングと関わる、ゆるく健康的なエクササイズとして楽しむダブルミーニング的な意味を含めた言葉です。

JJFで最も参加人数の多い層である学生さんは、一日に何時間も練習できたり、週に何日も時間を確保できたりします(もちろん例外もありますが)。しかし、社会に出るとそれが難しくなってしまう、そのギャップによって、それまで熱心にジャグリングを続けてきた人がきっぱり離れてしまうプレイヤーで無くなるから離れてしまう—そんな現実もあります。

けれども、それはもったいないなあと思うのです。技術の問題ではなく、「つながり」が途切れてしまうから。プレイヤーでなくてもなんらかの形としてジャグリング文化に関わり続けることはできますし、プレイヤーでなくてもジャグリング界はきっと受け入れてくれると私は考えています。

実は、これと似た事をSWJ No.62で花田さんが「生涯ジャグリング」と表現していました。

『生涯ジャグリング』はジャグリングを辞める事を肯定します。『人生長いんだから、ちょっとくらい辞めてもいいじゃん、でもジャグリングに戻ってこれるといいね』くらいの感じですね。

私も同意見です。年に一度、JJFの飲み会に顔を出して近況を語り合うだけでも良い。久しぶりに道具を手にとって、「ああ、やっぱり楽しいな」と思えるだけでも良い。そうして続けていくゆるいつながりもジャグリング文化を支える大切な一部になると思います。実は今回、何年ぶりかに同期や後輩たちと再会できたということもあり、私にとっても本当に嬉しい経験でした。

最後に

重ねてになりますが、JJF2025は本当に多くの方々の支えによって無事に開催することができました。最高のステージを作り上げてくださったCS出場者とゲストの皆さん、そして舞台チーム。その熱を世界中へ届けてくれた配信チーム。メイン会場で3日間、熱狂の火を絶やさず盛り上げ続けてくれたワークショップ講師やイベント関係者の皆さん。当日の運営を支えてくださったスタッフ。年始から約9か月間にわたり、初めての会場で手探りの中イベントづくりを続けてくれた実行委員会。そしてなによりJJF2025に参加して下さった皆様。JJF2025は、そうした多くの方々の力と想い一つになって初めて成り立ったものです。本当にありがとうございました。

また、これまでJJFを築き、繋いできた歴代の実行委員会の皆さま、日本ジャグリング協会の皆さま、そしてすべてのジャグラーに心より感謝申し上げます。

JJF2025がコロナ禍以降、かつてない盛り上がりを見ることができたのは、間違いなくあの困難な時期にジャグリング文化を守り続けてくださった先人たちのおかげです。JJF2025がこれまでの積み重ねの上に、少し新しい何かを上乗せできていたら、それほど嬉しいことはありません。



JJF2025 チャンピオンシップ

決勝審査結果

予選・決勝審査委員：八幡雄士（審査委員長） 松永将汰 岩倉玲 小澤駿弥 杉戸洋太 西川歩美 山本孝 石水泰樹

決勝進出者

- 男子個人部門 伶俐、KENTO、柴田光之進、八神凜太郎
三角健、暮井透、森澤宏樹、松村高朗、小緑謙介
- 女子個人部門 宿里美緒、大友瑠衣子
- チーム部門 にはたづみ、kikyuuiki、Magic Hours、passmap

審査結果

- 男子個人部門 1位：八神凜太郎 2位：小緑謙介 3位：森澤宏樹
- 女子個人部門 1位：宿里美緒 2位：大友瑠衣子
- チーム部門 1位：passmap 2位：Magic Hours 3位：kikyuuiki

【男子個人部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	順位点合計	順位
伶俐			6				6		2	
KENTO		6	5	5	4	6		5	11	
柴田光之進	4	5		6	5	3	3	3	23	
八神凜太郎	1	1	1	1	1	1	1	1	80	1
三角健	5	4	4	4		5	5		15	
暮井透									0	
森澤宏樹	3	3	3	3	3	4	4	4	34	3
松村高朗	6				6			6	3	
小緑謙介	2	2	2	2	2	2	2	2	56	2

【女子個人部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	順位点合計	順位
宿里美緒	1	1	1	1	1	1	1	1	80	1
大友瑠衣子	2	2	2	2	2	2	2	2	56	2

【チーム部門】

エントリー名	審査員A	審査員B	審査員C	審査員D	審査員E	審査員F	審査員G	審査員H	順位点合計	順位
にはたづみ	4	4	4	4	4	4	4	4	24	4
kikyuuiki	3	3	3	2	3	3	3	3	42	3
Magic Hours	2	2	2	3	1	1	1	1	66	2
passmap	1	1	1	1	2	2	2	2	68	1

※1 7位以下の順位には審査点が付きません。順位点は1位から順に10、7、5、3、2、1点となります。

JJF2025CS 予選講評 岩倉玲

予選審査を終えての感謝とご報告

Japan Juggling Festival チャンピオンシップ (JJFCS) 2025 におきまして、今年は地方開催にもかかわらず、大変多くの熱意溢れるハイレベルなエントリーをいただき、審査委員・実行委員一同、心より感謝申し上げます。

予選審査は「JJFCS 開催要項」に基づき、8 名の審査委員によって「完成度」「難易度」「構成」「希少性」「エンターテインメント性」の 5 つの基準に従って厳正に実施いたしました。

この度の予選を振り返り、審査の鍵となった重要項目のうち、いくつかを共有させていただきます。

1. 総合力：審査 5 項目のアプローチ

審査の採点基準は 5 項目に及びます。この為、特定の要素のみが突出するのではなく、これらを統合した「総合力」が求められます。満場一致で通過判定となった選手においては、この総合力＝演目におけるスキのなさが非常に印象的でした。高い技術を、より優れた構成によってパッケージングし、審査委員に強い納得感を持たせておりました。難易度についてよりピックアップすれば、高い素材（技）を、いかに観客に伝わりやすく、魅力的に見せるかというプレゼンテーション能力が非常に重要です。例え同じ技でも、繋ぎ方、姿勢、リズム、キャッチの方法等、工夫次第でより魅力的に、かつ難易度が伝わりやすくなります。さらにそこへ構成の抑揚や、適切な間、音楽との調和が加わることで、技術以外の審査項目も相乗的に評価されていきます。質の高い食材（難しい技）をただ紙皿に乗せるのではなく、その特性を最大限に引き出すサイズと色の皿に美しく盛り付ける、というようなイメージでしょうか。特に上位通過層の選手においては、この点が際立っていました。技の技術的価値を、構成と完成度によって高めることができます。

2. ビデオ予選の前提：目指すべきは「ノーミス」

ビデオ予選という形式上、参加者の皆様は当然ながら自身が持つ最高のテイクを提出されます。このため、他の参加者もノーミス、あるいはそれに近い完成度の動画を提出してくるのが前提となります。

わずかなミスやブレであっても、他のハイレベルなエントリーとの比較において、可否を分ける決定的な要因となり得ます。特に圧倒的な難易度で他の要素を凌駕する構成でない限りは、ノーミスを高い完成度の前提として臨むことを強くお勧めいたします。失敗は構成やエンターテインメント性といった他の採点項目へも負の相乗効果を与えます。

予選通過をゴールとして定めた完成度、ではなく、「決勝で上位入賞し、日本一を掴むための構成はこれだ」という意味でのご自身のベストを目指すことで、予選通過の確率も上がりますし、結果的に決勝での演技クオリティも格段にアップするはずです。

3. 希少な道具における「技術のプレゼンテーション」

ディアボロやトスジャグリングなど競技人口の多い分野と比較して、比較的マイナーな道具でのエントリーがあったことを大変嬉しく思います。

これらの選手の皆様には、是非ご自身の道具や技の特性を、より明確にアピールしていただくことを期待します。「なぜこの技が魅力的なのか」「技術的な難しさはどの点にあるのか」を、専門外の観客にも深く納得させる「技術のプレゼンテーション」をより意識することで、演技がずっと魅力的になります。

4. 客観的な自己分析とブラッシュアップの徹底

構成およびエンターテインメント性で高い評価を得ている演者は、自己の強みと弱みを客観視できているパターンが多いです。ご自身の道具や演技の最大の魅力は何か、弱点があるならそれを補う演出や構成の工夫は何か、を深く追求してみてください。動画提出前には、一度時間を空けて客観的に見返し、改善点を徹底的に洗い出す「ブラッシュアップ作業」を何度も重ねることで、結果的に、この自己分析と修正の作業こそが、決勝ステージを見据えた演技クオリティの向上に直結します。

結びに

迷った際は、改めて開催要項をご確認ください。ご自身の強い項目は何か、ご自身ならこの項目をどう採点するか。ご自身の演目と開催要項、そして過去のチャンピオン演技を見比べることで、より深い演技分析が可能になります。

勿論、実はルールで禁止されている内容やレギュレーションに一致していなかった、ということが意図せずあるかもしれません。せっかくの演技がそれで評価対象外になってしまうのは勿体ないので、改めてのご確認をお勧めします。

今年もまた、審査委員一同、皆様のジャグリング人生や熱量が凝縮された、心が震えるような、鳥肌が立つほどの演技に出会える機会をいただき、心より光栄に存じます。

日々凄まじいスピードで進化するジャグリングの技術とパフォーマンスへのアンテナを高く持ち続け、選手の皆様が日本一の称号を目指し、各々が信じる最高のパフォーマンスを存分に演じていただけるよう、JJF 実行委員会と連携し、厳正かつ公正に審査の任を務めて参る所存です。

さらに発展・成長を遂げた皆様のジャグリングに、JJFCS2026 でお会いできることを心から楽しみにしております。

JJF2025CS 決勝講評 八幡雄士

今年のチャンピオンシップもまた、素晴らしいホールと選手、そして運営スタッフの皆様により、輝かしいひと時が創り出されました。このような場で審査委員長を務めさせていただいたことを非常に光栄であると噛み締めつつ、講評を綴らせていただきます。

女子個人部門は2組の出場となりました。準優勝の友大選手は、自身が持ち合わせるボイの技を丁寧なプレゼンテーションで遂行し、その味を引き出していたと感じます。そして優勝となった宿里選手は、傘という個性のある道具を主軸に衣装や小道具、音楽によって確かな世界観が創出され、尚且つノードロップで演技を完遂させたことにより傘回しの技の数々をその世界観と共にじっくりと堪能出来る内容だったかと思います。

チーム部門は4組と例年に比べ多い組数の出場でしたが、いずれのチームもそれぞれの強みがハッキリとわかる演技内容でした。優勝されたpassmapは各メンバーの純粋かつ高いクラブジャグリングの技術力をベースとし、王道な構成の展開によって観客を興奮し魅了させました。そして準優勝のMagic Hoursもまた、各メンバーの高い技術力だからこそ成し得る見たことの無いデビルスティックのペア技で観客を楽しませましたが、そこには彼らが演出したポップなキャラクター性が下地となっており、序盤からその軽快で明るいテンションで観客の心をグッと引き寄せていた印象が強く残っています。また、第3位のkikyuuiki、第4位のはたづみは、両チーム共に道具や技、ステージングの芸術性に重きをおいた見応えのある演技でしたが、kikyuuikiは物量の多さを生かした技のアイデアや演出、展開の密度により充実した演技内容でした。一方、にはたづみは相対的に物量が少ないのにも関わらず、珍しい道具の組み合わせによるアイデアと洗練されたボディーコントロールによる構図の巧みさが、緊迫した世界観も相まって観客の目を釘付けにしたかと思われます。

最後の部門である男子個人部門は9組の出場となりましたが、各演者の道具自体の多様に加え、それぞれの個性や強みが光る充実した内容でした。その中で入賞選手をピックアップいたしますと、第3位に輝いた森澤選手は3センターアイドリングという演技に組み込まれた前例が殆どない高難易度の技を披露し、更にはその応用技までも決めきったことが審査員同士の議論の中でも強く評価できるポイントとして挙げられました。実際、その応用技へ移行するために3センターアイドリングを基底状態として続けている様子でさえ圧巻であり、観客一同を興奮させたことでしょう。また、準優勝の小緑選手は、比較的多い個数のボールジャグリングを主軸としつつ、それらを長々と投げ続けられる地力の高さと操作性の淀みのなさも相まり、技術力の高さをまじまじと魅せつける演技であったと感じます。そして見事優勝を果たした八神選手は、チャンピオンシップ後半一番手という順番でノードロップの演技を披露し、尚且つご自身で作り上げた創造性と難易度を兼ね備えた技の数々を十二分に披露したことにより、観客一同を騒然とさせました。

トップレベルのジャグラーに共通して言える決して付け焼き刃ではない地力の高さは、ジャグリングの演技において観客を魅了する根底の要素だと私は思います。選手らが自身のジャグリングを信じ絶えず鍛錬を積んできた、

その奥行きこそ、チャンピオンシップで特に高濃度で得られる感動の1つであり、醍醐味とさえ感じます。そんな高級な蓄積を6分間に濃縮された演技が次々と披露されるチャンピオンシップというステージを、非常に尊く感じるばかりであります。

さて、今年は松本での開催ということで、これまでのチャンピオンシップでは使用されたことのなかったホールでした。それ故に過去に出場経験のある選手でもそうでない選手も含め、今回のステージで演技をするイメージが掴みづらく、だからこそ当日に初めてそのステージを目の当たりにし興奮と緊張が高まったかと思います。ステージの広さ、照明、空気感、全てが新鮮な感覚の中、それらに惑わされずどのように自身の力を発揮できるかが本番への鍵となります。集中力を最大に発揮し、本番でも練習のように落ち着いて演技できる選手や、本番の空気感や高揚感を味方にし、自身のパフォーマンス力へ最大限に生かす選手など、様々な方向性があるかと思います。一方、本番の空気に飲まれ、練習よりも上手く力を発揮できない選手もいるかと思われます。その解決方法は選手自身の特性によって様々でしょう。

私としては、たとえ最終的に結果が振るわずとも、選手の皆様にはこのチャンピオンシップというステージに立つ瞬間を心から楽しんでほしいと願っています。日本一のジャグリングパフォーマンスを決めるという本大会のコンセプト故、その緊張感やプレッシャーは絶大でしょう。ですが、そんな最高峰なステージに立つという経験を、誇りに思い、心から楽しみ、最高のひと時として味わってほしいと切実に思います。本番前、私は審査員席に座り、ステージ側を眺め、その空気を味わいながら、「このチャンピオンシップは、本当に変え難い素晴らしいものである」と改めて噛み締めました。

そして来年、チャンピオンシップは東京にて開催されます。その輝かしいステージにて今年のように、もしくは今年を更に超える盛り上がりが見られること、そして観客だけでなく、その舞台に立つ選手の皆さんが心からチャンピオンシップを楽しんでくれることを願い、以上を講評と致します。



決勝審査員の皆様

JJFチャンピオンシップ 入賞者コメント

女子個人部門 優勝 宿里美緒



CS優勝。執筆時点でCSから半月以上経過しましたが、いまだに信じられず実感があります。現在32才（92世代）ですが、噂によると歴代個人優勝者の中で最年長らしいです。今回の出場は、いろんなタイミングがかみ合った奇跡的なものでした。子供は気がかりなイベントのない時期で、仕事も多忙ではなかったし、なんといっても開催地が長野！義理の両親が会場から比較的近くにお住まいだったので、開催地を聞いたときに「子供を預かってもらえそうだし、予選出してみようかな・・・」と勝手に思いました。そこまで考えていたわけではないのですが結果的に子供にCSを見に来てもらえて、優勝の瞬間を見届けてもらえて、あの場で「おかあさんおめでとう」と言ってもらえて。本当に幸せです。いろんな方から「勇気をもらった」とか「頑張ろうと思った」とか、たくさん声をかけていただきました。ただただ運と環境に恵まれただけなので、「私ができたから、あなたもできるよ！」とはとても言えないです。でも、誰かの何かのきっかけになれば嬉しいです。

女子個人部門 2位 大友瑠衣子



今回、JJF2025に参加するにあたり、多くの方の支えがありました。本当にありがとうございました。憧れていた舞台に立つことができ、楽しい時間を過ごすことができました。今回の演技のテーマは、「諦めない強さ」としました。「○○だから」はあまり言わないようにしました。また、今まで見たことのないようなシークエンスをお見せしたいというサブテーマもありました。サブテーマになるシークエンスで会場が沸いた時には、嬉しかったです。

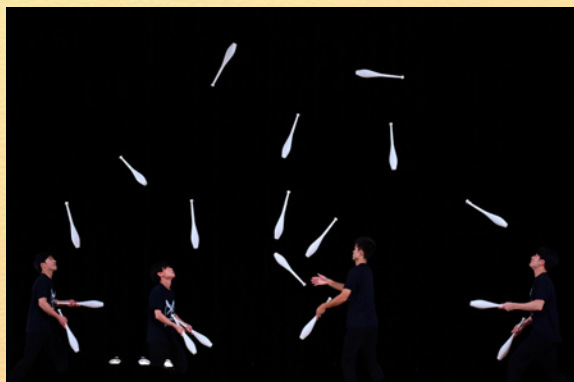
今まで、ほとんど大会に出てこなかったのが、演技構成や、シークエンスを周りの方々のアドバイスをもらいながら、試行錯誤しながら組み合わせていく作業から入りました。部分的に見てもらっては改善をしてという形で進めていったので、完成形がなかなか見えずにかなり焦りましたが、なんとか演技を完成することができました。当日は大会特有の緊張でミスは出ましたが、ドロップをせずに終わることができました。

演技後には、諦めなくて本当に良かったと思えました。

夢は大きく、またこの舞台で良いものを見せられるように精進したいと思います。

また、私の演技を見て、ポイっていいなと思っていただけてたら幸いです。

チーム部門 優勝 passmap



Compassとしては2年連続、ケントカイトとしては13年ぶりのJJFCSチーム部門出場となり、2回目の優勝をすることができたこと、大変嬉しく思います。

passmapのスタートは、JJF2024の期間中にCompassからケントカイトに声をかけたことがきっかけでした。Compassでは2人パッシングを練習してきて、複数人数での火力のあるパッシングもしてみたいということで、ケントカイトに声をかけました。The PastelsとJonglissimoの演技を特に参考にして4人でのチームルーチンを組んでいきました。

結成当時は居住地が関東と関西に分かれていたため、どのように練習を進めていくかが大きな課題だと感じていましたが、最初にその点について十分に認識のすり合わせができたことで、幸いなことにトラブルもなくルーチン作成や練習に集中することができました。チームメンバーにとっても恵まれたと感じた一つのポイントです。

また、CSを目指しているということは隠した状態での練習ではありましたが、練習光景を見て察した上で胸にしまっていた方にも感謝申し上げます。

更に、チーム練習にいつも付き合ってくれた谷岡翔人、今回のCSに共に出場できた柴田光之進など、多くの人の支えがあり本番に臨むことができました。

今回のルーチンを通して、遠距離でのチームの可能性を少しでも感じていただくことができれば嬉しく思います。

チーム部門 2位 Magic Hours



ゴリラ:

このチームを結成したきっかけは、私が「最強のペア技」を思いつき、それを一緒にやってくれる仲間を探していたところ、ハムハム君が快く協力してくれたことでした。ただ、2年半練習してもルーチンに組み込めるほど安定せず、泣く泣く断念することに...

いつか機会があればお披露目したいと思うので、見てくれると嬉しいです！

最後にお伝えしたいのは、チームルーチンは「作成」「練習」「本番」のすべてが本当に楽しいということです。今回の私たちのルーチンを見て少しでも興味を持ってくくださった方は、ぜひ周りのジャグラーとチームルーチンに挑戦してみてください！

P.S.トリオルーチンの相方を募集中です。ご興味のある方はぜひご連絡ください！

ハムハム:

JJFCSという舞台で演技できたことを心から嬉しく思います。

技を決めるたびに会場の歓声が大きくなっていくのを感じ、とても気持ちよく演技することができました。

「Magic Hours」は“Gori Hamu CS”のアナグラムで、2人でCSに出場するという目標を込めて名付けたチームでしたので、その目標を達成できて本当に良かったです。

ゴリラとチームを組んで過ごした2年間は、チーム技はもちろん、個人技でもお互いに高め合える時間だったと思います。

今回の戦犯バトルでは自分が勝利しましたが、真の決着をつけるべく男子個人を目指して努力していきたいと思っています。

チーム部門 3位 kikyuuiki



2024年の本番の出来が悔しかったのでブラッシュアップして臨んだ2025年。順位的には今までよりも下がってしまいましたが、本番の出来や内容は満足いく出来でした！

また、過去に出場した中で1番チーム部門の参加数が多い年でしたが、本当に楽しかったです。これからもチームがたくさん出るといいな、kikyuuikiもまた出たいなあと考えるCSでした。

2025年もありがとうございました。またどこかで会いましょう！

男子個人部門 優勝 八神凜太郎



JJFCSの舞台での演技は、私にディアボロの楽しさを思い出させてくれました。

大会に出続け、なまじ結果を重ねた私は、いつか1位を取ることに執着にとらわれ、どれだけ練習しても先が見えない不安と重圧に押しつぶされそうになっていました。そんな状況から解放されたいと、不純な動機でCSへの出場を決めました。

大会の練習は、評価されるであろう難易度と新規性を兼ね備えた技を作り、ミスなく決めるよう何百何千と繰り返すだけの無感動な作業でした。しかし、JJFに向けた長い練習の時間は徐々に、自分を支える、アドバイスをくれる先輩、切磋琢磨する仲間、応援してくれる人たちの存在を私に実感させました。自分のことだけに目を向け、苦しい表情で演技をすることが、この人たちに、JJFCSという舞台に失礼だと気付きました。

だからこそ当日は、今だけドロップも順位も気にしないで、誰よりもこの舞台を楽しんで、自分を見てくれる人たちへ感謝を伝えようという気持ちで臨みました。結果として、その思いを最上の形で表現できたと感じています。懸けてたディアボロで喜んでくれる人、涙してくれる人に触れて、ようやくディアボロの「演技」ができたと思いました。

今は、新しい技を作るとき、次の演技を考へるとき、「皆驚いてくれるかな」という期待に満ちた子供のような、そんな気持ちです。

男子個人部門 2位 小緑謙介



【JJF CS本番について】

まずはJJFCSという憧れの舞台で演技ができたことをとても嬉しく思います。

当日は本番が近づくに連れ、楽屋でも舞台袖でも今までに感じたことのないような緊張をしていました。

ですが、大きい舞台に立って音楽が流れ出した瞬間からは楽しくて楽しくて仕方がなかったです！

【練習について】

ルーチンの練習は毎日一人ですべてやっていたことや、上達しないことが原因で苦しい期間もありました。

ドロップの回数が減らず伸び悩んだり、ドロップはしなくてもミスがかさばったり。

ですが、毎日ルーチンを通し続けていると徐々に落とす気配がなくなっていき、ノーミスノードロップがでることも増えました。

こうなってくると「絶対に落とさない」という確信のようなものが生まれて来るのでルーチン練習が楽しくなっていました。

【ルーチンについて】

今回のルーチンでは過去入れていないような難しい技を多く取り入れました。

惜しくも本番に成功させられなかった技もありますが、難しい技に大舞台でチャレンジすることができて良かったです。

また、ルーチン練習は自分史上過去最高に頑張り、本番を迎えたので、やはり当日も、全ての技において「絶対に落とさない」という確信を持って本番に挑めました。

【最後に】

最後にJJFの運営の皆様、ルーチンをつくる段階で見てくださった方々、当日盛り上げていただいた方々に感謝申し上げます。

男子個人部門 3位 森澤宏樹



チャンピオンシップという大きな舞台で演技できたこと、そして入賞という形で結果を残せたことを大変感慨深く、とても嬉しく思っております。多くの方々のご協力があったからこそ成果だと感じております。本当にありがとうございました。

今回の演技は「一回のルーチンで、デビルスティックの歴史を二度塗り替える」をコンセプトに作成しました。シングルパートとデュアルパートを基盤に据え、トリプルパートの希少性と難易度で畳み掛けるという、一風変わった構成にしました。特にトリプルパートでは、怒涛の三技構成を盛り込み、「トリプルアイドリングを安定して行えること」「トリプルアイドリングから技を挟み、再びトリプルアイドリングに復帰できること」という二点で、デビルスティックの歴史を二度塗り替えることを目指しました。

このパートは最も練習に苦戦した部分でもあります。同時に最も気に入っている部分でもあります。今回の演技が、少しでもデビルスティックの歴史の一頁として残ってくれたら嬉しく思います。

次に歴史を変えるそのとき、再びチャンピオンシップの舞台に立ちたいと考えています。その日まで精進を続けます。ありがとうございました。



フィンランド・タンペレ出身のサーカスアーティスト。2016年にストックホルム芸術大学（旧DOCH）を卒業。流れるような身体の動きをベースにしたジャグリングを持ち味とし、今までに世界15カ国で公演を行なっている。従来のいわゆる「ジャグリング道具」を使ったジャグリングでも一級品のテクニックを持つが、新しい素材やモノの探求にも積極的に取り組んでおり、ジャグリングの表現の幅を広げるプロジェクトを多く行っている。

カンパニー・ヌーア、シルコ・アエレオ、キネティック・オーケストラなどといったカンパニーでの出演のほか、『アマルガム』（2019）、『ステュギアン』（2025）といった、自身がプロデュースする作品のクリエイションも行っている。



ゲストインタビュー1 Onni Toivonen

オンニ・トイヴォネン

アルジェ (以下、ア) : ゲストステージを終えての感想をお願いします。

オンニ (以下、オ) : 楽しかったです! JJF でパフォーマンスをしてみたいと思っていました。今までもゲストのお誘いはあったんですが.....。予定が噛み合わず何度も断ってきたから、ついに来られて感無量です。

ア : JJF への出演が決まった時はどんな気持ちでしたか。

オ : ワクワクしましたよ。出演が決まってすぐ、新しい演技作りのために動き出しました。今回披露した演技は、JJF を目標に作ったものです。ここに来ること自体が創作のモチベーションになりました。

ア : では、簡単に自己紹介をお願いします。

オ : ジャグリングを始めたのは5歳の時です。母と一緒にコースサーカス (青少年が学ぶサーカス) のショーを見たのがきっかけ。パフォーマンス後、母に頼んで僕もコースサーカスに入りました。5歳の時には3ボールカスケードができたかな。でも当時は、ジャグリングに特別な関心があったわけではないです。本格的に取り組み始めたのは、11、2歳になってから。ヤニ・スイフコネン (Jani Suihkonen) と、クリスチャン・ヴァンヴィック (Kristian Wanvik) という先生に教わっていました。

その後一般の高校を卒業して、プロのパフォーマーになりたくてストックホルムのサーカス学校 DOCH (現・SKH) に入学しました。そこも卒業したら、ドイツのバリエテ (バラエティショー) や、フィンランドのコンテンポラリーサーカスカンパニーで働き始めました。

仕事では、ジャグリングだけではなく他のスキルも使います。最近はダンスにも力を入れていて、6人でやる1時間のショーで、ジャグリングはたった3分間しかないパフォーマンスをやったりします。

ディレクターとしてショーを作ることもあります。僕がディレクションをしたのは『アマルガム (AMALGAM)』が最初の作品。次が最新作の『ステュギアン (STYGIAN)』です。どちらも、ダンサー、照明デザイナー、ミュージシャンなど、他ジャンルの人とコラボしています。YouTube にトレーラー* (注1) がありますよ。

ア : やはり、クラブをやってきた時間が一番長いですか。

オ : そうですね。何より練習してきたのはクラブです。でも、新しいモノを探索するのも好きで、ボール、リング、デビルスティック、シガーボックスといった既存の道具ではないオブジェクトも、いろいろと研究しています。木の板を頭の上で回したり、孔雀の羽を使ってみたり。新作『ステュギアン』では、石を使っています。

ア : ゲストステージの演技のコンセプトは、どのようなものでしたか。

オ : 「クラブがうねるように動く」というのが最初のモチーフです。身体の周りに魚や蛇がまとわりついてくるようなイメージ。それを元に、構想を膨らませていきました。少しずつ演技に使えるような材料を集めて、ひとつの作品としてまとめました。クラブ1本の時は、身体の近くで、流れるように動いている。続いて、3本、5本でその質感とマッチする振り付けを作りました。

5クラブでは「身体の近く」という縛りだと流石に難しいので、少し制限を緩くして、「螺旋状の動き」という縛りで動きを作りました。全体の雰囲気は損なわな

い動きを少しずつ積み上げていきました。でも同時に大技も見せたいので、それも上手く入れ込むようにしました。

ア : オンニさんは、通常のクラブよりも大きいアルバトロスクラブを使っていますよね。何か理由があるのでしょうか。

オ : 単純に、僕の身体が大きいからです (笑) (編集部注 : オンニは身長が194cmある)。普通のクラブを使うと小さく見えちゃって。欲を言えばもう少し長いクラブでもいいくらいです。

ア : 演技で使用した音楽について教えてください。

オ : コンスタ・レイノネン (Konsta Leinonen) というミュージシャンが作った音楽を使用しました。2016年からずっと一緒にクリエイションをしていて、音楽が必要な場合はいつもコンスタに頼んでいます。加えて、彼はディレクターとしても僕の作品に関わってくれています。演技をつくる過程で、ジャグラーではない彼の意見を絶えず聞くようにしています。コンスタが僕の振り付けを見て「うん、これはいいと思う」と言えば合格、というように。下手にジャグリングのことを知らない人の方が、フラットな意見をくれるからです。

コンスタは本当にいいミュージシャンですよ。ジャグラーとして、優れたミュージシャンとコラボができるのは、とても幸せなことだと思います。

ア : 今回の演目は、具体的にどのように作ったのでしょうか。

オ : 演技の作り方には、2パターンあります。コンスタに音楽を先に作ってもらうか、あとに作ってもらうか。今回は、あとから作ってもらいました。まず僕が仮の音楽でジャグリングの振り付けを作りました。次にその振り付けに合う音楽をコンスタが送ってくれました。それから細かいやり取りと修正を繰り返して演技を完成させました。





ア：観客のリアクションについてはどう感じましたか。

オ：すごくいい気分でしたね。僕のジャグリングをよく理解してくれている感じがしましたよ。パフォーマンスしていて楽しかった。でも、レベルの高いジャグラーたちに見られながらジャグリングするのは、緊張したなあ。ベストを尽くさなきゃと思いました。

ア：来日以前は、日本のジャグラーについてどんな印象を持っていましたか。

オ：若い頃『Japanese Jugglers』というビデオが大好きで。もう 200 回くらい見たと思うんだけど（笑）、そこから得た印象がやはり大きいですね。今でこそセントカイト（谷岡健人、海人）や、マサヒロ（高橋優弘）や、クレイジーなナンバーズをやっている人がいっぱいいる、という印象があるけど、00 年代の印象は、ちょっと違いました。

日本におけるジャグリングカルチャーには、道具を選んだら、自分だけのユニークなスタイルを育てていく、という風土がある感じがします。ジャグリングを始めるとすぐに「こういうジャグリングがしたい」というビジョンを持つというか。ヨーロッパやアメリカでは、もう少し「一般的なジャグリング」を長い間やる人が多い印象があります。

ア：実際に来日して、どうでしたか。

オ：やっぱり、ジャグリングのレベルがとても高いですね。上手くなることを意識している人が多くて、それが素敵だなと思う。でも実を言うと、ゲストステージの準備があったからまだほとんど体育館で時間を過ごしていないんです（編集部注：インタビューは3日目の午前に実施）。

CS に代表されるような、自分のジャグリングを「競技」という形でプレゼンする文化は、間違いなくジャグリングスタイルに影響を与えていますよね。それと日本では、ジャグリングとサーカスの結びつきが薄い、ということも影響が大きいはず。ヨーロッパにおけるジャグリングは、現代サーカスやアートという文脈と密接に結びついています。日本の環境は、僕が育ってきたジャグリングの環境とはだいぶ違うと思う。

ア：CS の雰囲気や演技で、印象的だったことはありますか。

オ：たくさんありますよ！ CS はとにかくユニークなイベントですね。IJA フェスティバルとか、他の競技会がどうなのかはよく知らないけど、観客がすごく声を出すなあと思いました。一体感があって、舞台上でジャグリングをしている人に心情を重ねているというか。あと、思っていたより公式感がありました。セレモニー感というか。最後にみんなスピーチをするところとか。これは意外でした。

もちろん動画では見たことがあったけど、実際に現場にいて生で見ると、プロフェッショナルなアナウンスなども含めて全部、厳かにやっているなあという印象で。運営側にとっても演者側にとっても、すごく大事なイベントであることが伝わってきました。いい経験でした。

ア：会いたい人とは、交流ができましたか。

オ：マサヒロと体育館で会いたいんだよね。ケントカイトにも挨拶してないし。他にも会いたい人はいっぱいいるよ（編集部注：インタビュー後、体育館でおおいに交流していました）。

ア：今後の展望を教えてください。

オ：新作ショーの『ステュギアン』でツアーをしたいです。でもとりあえず半年間は、シュトゥットガルトの「パラッツォ」という劇場でショーをする予定です。あとは、コンテンポラリージャグリングアートを作りたい。新しいものを作り続けて、作品のツアーをして……願わくはそれで稼ぐことができればいいな。

ア：普段は、どんな練習をしていますか。

オ：仕事が忙しい時期と、作品作りをしている時期で、かなり違います。ここ一年半くらいは決まった契約の仕事で忙しくて、毎日ジャグリングをすることができなかった。今は、もっと自由にジャグリングに取り組みたい気分です。特定のプロジェクトに向けた練習ではないことをやりたい。基礎を練習したり。ジャグリングに限らず、自分の芸全般について、新しいことを発見したいです。

ア：日本のジャグラーにメッセージをお願いします。

オ：まず、日本ジャグリング協会と JJF 実行委員の方々に感謝を述べたいです。あとは今回来日して、僕ももっと上達したいなあ、という気持ちになりました。本当に良かったです。日本の皆さんもぜひ、そのまま突き進んでいってください！

ア：ぜひ、残りの時間で交流をめいっぱい楽しんでください！

オ：（日本語で）アリガトウゴザイマス！

インタビュアー：アルジェ

通訳・構成：青木 直哉

注1：『ステュギアン』 <https://youtu.be/uSaE4yc01YQ?si=LlOSomdV4-yiWNhj>



ゲストインタビュー2

工藤正景



ディアボロのエキスパート。音楽と繊細に組み合わされたパフォーマンスは観る人を魅了する。2012年の大学入学時にディアボロを始める。ディアボロに傾倒し、技術向上に励む。2017年にAJDC（全日本ディアボロ選手権大会）ならびにJJFチャンピオンシップで優勝し、日本一となる。コロナ禍で自分自身のやりたいことを見つめ直し、勤めていた会社を辞めてパフォーマーとしてのキャリアをスタートする。国内で開催される大道芸フェスティバルに多数出演。2024年にはヨーロッパを拠点とするクルーズ会社「MSCクルーズ」の客船「MSC Virtuosa」の船内アーティストとしてオファーされる。大道芸・ステージショー・サーカスを横断的に活動しながら現在もディアボロの技術向上に努めている。

実績と出演歴

- JJF2016, 2019, 2022 チャンピオンシップ チーム部門決勝出場
- JJF2017, 2018, 2021 チャンピオンシップ 男子個人部門出場（2017 優勝、2021 3位入賞）
- AJDC2017, 2022 男子個人総合部門 優勝
- IJA Juggling Championships 2023 ファイナリスト
- 空転劇場 Vol.25 『いまを重ねて』 Vol.38 『歩を刻む』 出演
- MSCクルーズ 船内ショー 『ARKYMEA』『AJEDREZ』 出演
- 大道芸ワールドカップin静岡2024 オン部門ニューカマーズ枠 出演



クロ助（以下、ク）：まずは簡単に自己紹介をお願いします。

工藤（以下、工）：ディアボロプレーヤーの工藤正景と申します。2012年からディアボロを14年やっています。2016年と2019年と2022年にチャンピオンシップ、チーム部門に出場。2022年に3位に入賞しています。2017年、2018年、2021年に男子個人部門に出場。2017年に優勝。2021年に3位に入賞しております。

ク：本当に素晴らしい実績です。そして、今はプロパフォーマーとして活躍されているということですね。

工：はい。プロとしての活動を始めたのが2023年の4月からなので、今3年目になりました。

ク：早速、JJFのゲストステージに関するお話なんですけれども、まずは率直にオファーが来たとき、どのように感じましたか。

工：ゲストステージって、チャンピオンシップとは違って出たいと思って出られる舞台じゃないので、オファーをいただけて、とてもうれしいなっていうのが率直な感想です。

ク：今回のオファーは意外だったのか、やっと来たのかだったのか、どちらでしょう。

工：意外でした。今回の演技は大道芸で披露するためにつくったもので、その後のイベントも基本的に大道芸でやるが多かったと言いますか、それ以外に機会がなかったので、劇場でやることは想定してなかったですし、驚きました。でも、ジャグリングのパフォーマーで、一つの道具で長尺の演技をできる人は意外と少ないですし、あまりジャグリング以外の要素は含まれていない演技になるので、振り返ってみると、ゲストステージに合っているかもとは思いました。

ク：JJFのチャンピオンシップも優勝されて、ジャグリングプレーヤーとしての実績は十分、そして今プロパフォーマーとして活躍されているので、私からすると順当かな？みたいなイメージではありました。

ク：今回の演目、パフォーマンスに関するこだわりなどがあれば、お聞かせ願えますでしょうか。

工：『Shall We Juggle?』のインタビューがあることをすっかり忘れていて、今回の演技のコンセプトを自分のnoteで書いてしまいました。かいつまんで話すと、

僕はチャンピオンシップに出場するときの演技は、何かしらタイトルとかテーマとか、ルーティンの内容を決めるための、こだわりみたいなものを必ずつくって演技をつくっていたんですが、ゲストステージの今回の演技は、あえて、そういったものをつくらずに、ディアボロに集中して、ただディアボロをするということを目指した、こだわりを持ってつくった作品になります。

なので、結果的にはこだわりがないのがこだわりみたいな形になりました。

ク：ということで、詳しいことは工藤さんのnote（注1）にも書いてあるようですので、そちらの方もぜひご覧いただければと思います。

ク：せっかくなので、演技に関して私が気になったことも含めて聞かせてもらえますか。純粹に今、ジャグリングのこの技にこだわった、などはあったりしますか。

工：ハイトスにこだわっています。特に、手でディアボロを投げ上げて、ひもでキャッチして、またハイトスをする動きを、すごく象徴的に扱っています。例えば、手投げでディアボロを投げてハイトスに入るシーンは、かなりたくさん入れていますし、最初の無音の状態ディアボロを投げる所作があったりとか。

1曲目の演技のときに、最初、ディアボロをハイトスする軌道をちょっとずつ大きくしてって、1曲目の終わりでは高く上げたディアボロの軌道を、ちょっとずつ低くするような技の流れを入れて、ハイトスをする動きを何回も登場させることによって、シンボル、象徴的と言いますか、動きが印象に残るような形にしています。

ク：また、Xで拝見したのですが、よく4ディアボロロウの練習もされていると思います。あれも、かなり長い期間取り組んでいますよね。

工：そうですね。4ディアボロロウの練習自体は2015年の8月ぐらいからやっています。ライブ配信とか家の中で積極的に練習するようになったのが2018年ぐらいかな。頑張ってやっております。

ク：プロになっても日々、実力を磨き続けるというのは、素晴らしいです。そして、今回の演技では、4ディアボロロウと4ディアボロハイトスの両方を入れましたもんね。さすがでございます。

工：すごい負担が掛かるので、あんまりやりたくないんですけど。

ク：そうなのですね。ちなみに、ディアボロの素人で恐縮なのですが、負担というのは、身体的に腕に疲れがたまる的な負担ですか。精神的なものでしょうか。

工：両方ですね。単純に4ディアボロロウも、4ディアボロハイトスも、練習しているときの腕への負担が大きいです。あんまり長い時間は練習できない側面があります。あと、終盤でプレッシャーが掛かるところで難しい技にチャレンジする、しかも2連続で、みたいなところは、精神的につらくなって感じることもあります。今回のゲストステージのパフォーマンスも、リハのときに4ディアボロロウが決まらなくて。

3回チャレンジしたんですけど3回とも決まらなくて、そこで曲が終わっちゃったから4ディアボロロウを諦めて、無理やり4ディアボロハイトスに入ったんですけど、そこも5回ぐらい決まらなくて。なので、相当プレッシャーが掛かる技ですし、きっちり調整していかないと、本当に決まらずに演技が終わるみたいなことも起こる状態です。

ク：工藤さんでも、それぐらい難しい技なのですね。それを、しっかりと本番で入ってくるのは、さすがだと思います。

工：本番は上振れましたね。

ク：そうなのですね。途中までは安定度が抜群で、最後に少し3ディアボロでミスがあったくらいで、すごかったです。

ク：今年のチャンピオンシップの感想を聞かせてもらえるでしょうか。

工：チャンピオンシップって、みんなの憧れの場所で、みんなが目指す場所になっているので、年々、技のクオリティーとか、目新しさ、複雑さが増してきている印象を受けました。かいつまんで挙げると、チーム部門の Magic Hours のパフォーマンスは、楽しい雰囲気の中に新しいデビルスティックのペア技がたくさんあって、すごく新鮮な気持ちで見えておりました。それと、男子個人の、クリスタルボールの KENTO さん。過去にもチャンピオンシップで演技を見たことがあったんですけど、技の引き出しと言いますか、動きの引き出しが非常に多いなと感じてまして、その点ですごくいいなと言いますか、好きだなってような印象を受けます。あとは、デビルスティックの森澤さんの最後のセンタースティックの技だったりとか、どんどんレベルも上がっているし、新しい技を、みんなやっているんだなっていう印象をすごく持ちました。優勝した八神くんは言わずもがなですね。

ク：すご過ぎて、何してんの？となり、口を開いて、ぼかーんとしてました。

工：そうですね。かなり複雑でリスキーな技をずっとやっていて、ディアボロの僕から見ても、底上げされていた印象を持ちました。



ク：プロパフォーマーの活動について聞かせてもらえますでしょうか。

工：普段の活動は9割ぐらいがパフォーマンスの活動をしていて、1割ぐらいがコーチング、ディアボロを教える仕事をしています。パフォーマンスに関しては、大道芸が多いですね。自治体や施設が許可した大道芸のポイント、ライセンススポットとか許可された場所で活動しています。大道芸のライセンスで一番有名なのが、東京都が実施しているヘブンアーティストというライセンスで、上野公園とか葛西臨海公園とか代々木公園とか、都内の要所で大道芸ができるものです。それ以外にも似たようなライセンス制度がいくつかあり、それらを掛け持ちして、いろんな場所でやらせていただいています。

その他、大道芸のフェスティバルだったり、商業施設での土日のイベントへ出演したりしています。

ク：ありがとうございます。工藤さんは以前、aube（注2）の舞台公演に出たりとかもあったと思いますが、今は舞台や劇場での活動は何かされているのでしょうか。

工：スポット的にご依頼をいただくことはありますが、そんなに多くはないですね。僕の営業の仕方が違うんだろうなって。まだ劇場にも興味はありますし、チャンピオンシップの演技とかも劇場系のほうが合う気はしているので、もし可能ならそういった仕事も増やしていきたいなと思っているんですが、すぐには増えないのが現状ですね。

直近では、沖縄のマジックバーでパフォーマンスするお仕事を12月にいただいたりしています。でも、それも単発ではありますね。

ク：私のジャグリングオタク的な質問になっちゃうかもしれないのですが、工藤さんは、昔は競技者としてチャンピオンシップに出場され、今はプロパフォーマーとして活動されているので、当然ながら見る相手が変わる。演技をつくる目的が変わってくると思うのですが、昔と今で、ジャグリングの練習や意識で変わったところや意識的に変えたものはありますか。

工：あります。ただ、ディアボロに関しては変わっていないです。チャンピオンシップに出場していたときと同じように、例えば、ナンバーズを頑張るとか、やりたい技をやるというのは、そのまま継続しています。ただ、大道芸をするにあたって、ディアボロだけだと難しいシーンと言いますか。お客さんに興味を持ってもらったりとか、興味を持ってもらったお客さんが、より近くに来て楽しんでもらえるようなショーをするためには、他の道具を練習する必要があるという点では変わったような感じがしています。例えば、僕は大道芸のときはクリスタルボールやダイススタッキングをやったりしています。

ク：意外ですね。イメージにないです。だから、逆に見てみたい気がしますね。

工：競技者のままでいたら、あるいはプロパフォーマーにならなかったら、ダイススタッキングなどをやることはなかったと思うので、そういった意味では、食っていくために芸を練習するみたいな側面が増えたところはあると思います。あと、細かいところで言うと、練習の内容も、ちょっとだけ変わっています。例えば、昔は新規性が高い技とか、より構造が複雑な技とかが、競技会の配点が高くなる傾向があるので、そういった技を練習したり、自分で考えたりすることが多かったのですが、大道芸や一般のお客さまに見せるパフォーマンスの中では、そこまで、そこには、重きは置かれていないように感じています。

なので、4 ディアボロなどシンプルだけどダイナミックな技をより練習するようになりました。最初、ディアボロは変わらないと言ったんですけど、そういった意味では変わっているかもしれません。

ク：先ほど話題に出たコーチングは、こういった形の指導ですか。

工：本当はディアボロの教室をやりたいんですけど、現状は練習しようとしている人や、レッスンを依頼してくれた人の場所に僕が出張して、マンツーマンで教える形にしています。今は、かなり僕のリスクが少ない形でやっているというのが正直なところではあります。みんなに来てもらう場づくりもしていきたいとは思っているんですけど、一方で、人を集めて継続的に教室だったり練習会を開くことが難しくですね。どこでやるのか、継続的に僕のスケジュールを押さえるとか、場所を借りていても、そこに人が来るのか？みたいな、集客とかマーケティングみたいな話で、二の足を踏んでいる状況になります。

ク：確かに、そういう話はよく聞きます。教室のようなものも今後の発展によって是有り得るということですね。

工：僕が今コーチングをしていて感じていることなんですけども、SNS で、「ジャグラーの人たちは、みんなシンガー・ソングライター」という内容のポストを見掛けて、言い得て妙だなと思って。

ク：全ての作業を1人でやっている、という意味でしょうか。

工：そうです。例えば、技の構成や練習はもちろん、衣装や音楽、体の動かし方とか所作を全部1人で考えている印象を持っています。これは僕もそうだったので、共感もできるんですが、一方で、今回のゲストステージの演技は目黒陽介さんにご協力いただいてつくったもので、人の力を借りると、また違うテイストの演技ができることを実感しました。あるいは、より自分が高まった状態と言いますか、引き上がった状態の演技ができるということをすごく感じております。なので、あんまり抱え込み過ぎないで。

ク：いろんな人の意見を聞くのも大事ですね。

工：自分の力で頑張り過ぎても個々の力の限界がどこかに出てくることをすごく感じていて、例えば、振り付けとか演出が得意な方に自分の演技を見たら、より良くなる可能性がぐんと上がりますし、技を教えるのが得意な人に聞かに行ったら、すぐにできることもあります。特にディアボロは、コツをつかむとできるようになるみたいなポイントが結構あったりするので、人に頼ると劇的にうまくなる、みたいなことが起こります。他の道具でも同様のことはあると思っています。

今後のジャグリング界隈の発展、特に技術力のベースアップには、そういった要素も必要かなと感じています。みんなが過去の動画を見ながら一人で頑張るというのを続けても限界が来てしまうかもと思っているので、そういったところも含めて、指導とかコーチングも進めていきたいと思っています。

ク：指導やアドバイスをするという意味では、最近活動を始めた Nagotsuki Farm (注3) などによく名前を聞きますね。今回のチャンピオンシップだと森澤さんと暮井透さんは Nagotsuki Farm の指導が入っているはずですね。いろいろな人の指導が得られる環境が徐々に整ってきており、ジャグリング業界全体も底上げされていることを感じています。

工：そうですね。教える人にも得意、不得意があるので、選択肢が増えることは良いですね。目黒さんに作っていただいた今回のような演技は、Nagotsuki Farm に依頼してもできないかと思うので。

ク：目黒さんと Nagotsuki Farm では考え方や方針も違うでしょうね。

工：教える人にも特色があるので、教える仕事をやる人が増えたらいいなと思いますし、増えれば増えるほどジャグリング界も発展していくと思います。うまくいきたい人の選択肢が増えるので、人に教えるのが好きだなんて感じる人、興味がある人は、どんどん始めていいと思っています。

ク：最後に JJF の参加者の方へのメッセージをお願いできますでしょうか。

工：JJF は今現在、日本のジャグリングシーンをつくっているイベントだと言えると思います。練習会場でうまい人と交流したり、チャンピオンシップで競い合っている人を見たり、ゲストステージで海外の人の演技を見るというのは、間違いなく、どの世代、歴のどの道具のジャグラーにとってもプラスになるものだとは思っています。僕自身も2012年から、十数回参加させていただいて、イベント自体もすごく楽しめましたし、確実に僕のジャグリングの身になっていると思います。ですので、興味がある人は JJF に足を運んでみてはいかがでしょうか。そして、余力や時間がある限りジャグリングを楽しんでいったら、みんなハッピーなのかなと思っています。

ク：ありがとうございました。

インタビュアー：クロ助

注1：https://note.com/diablo_kudo/n/n17108347884e

注2：ジャグラー稲葉悠介が率いるパフォーマンス演劇を創作する劇団。

注3：デビルスティッカー・矢口純による、ジャグリング大会出場者へのコーチング、および大会運営者への総合サポートサービス。



くるくるシルクDX × 信州ユースサーカス



くるくるシルクDXは、1997年に始動した「シルク・空（くう）」、2000年からの「くるくるシルク」を経て、フランスのサーカスで修行を積んだケイスケが再び加わり、現在の“DX”として活動中。30年近くにわたり、大道芸や舞台でジャグリングや身体表現を駆使した“くるくる”ステージを展開しています。
今回は大人から子どもまで楽しめる内容に加え、地元である信州ユースサーカスメンバー（モモ、ミノッチ、ナオミ、タクム、ルーミー）も加わって、よりデラックスにお届けします！

まゆこ（以下、ま）：まずは、皆さんの自己紹介をお願いします。

立川（以下、立）：くるくるシルクのブルーの立川です。

高橋（以下、高）：くるくるシルクのレッドの高橋徹です。

藤居（以下、藤）：くるくるシルクのイエローの藤居です。

金井（以下、金）：そして DX で加わる、ピンクの金井ケイスケです。信州ユースサーカスの代表でもあります。あとはまつもとジャグリングクラブという練習会もやっております。

ミノッチ（以下、ミ） 信州ユースサーカスの、ミノッチです。

モモ（以下、モ） モモです。

ナオミ（以下、ナ） ナオミです。

タクム（以下、タ） タクムです。

一同：よろしくお願いします。

金：今回のゲストステージは、このメンバープラス、信州ユースサーカスで講師をしている、るみさんも参加していました。ちなみに、るみさんと私とミノッチは家族です。

ま：ご家族だったんですね。ユースサーカスの皆さんのおかげでさらに華やかな舞台になっていて、素晴らしいかったです。ありがとうございます。

立：若さがありますから。フレッシュ。

ま：若さって大事ななって。（笑）

ま：最初に、JJF2015 の郡山にも出演されたくるくるシルク DX の皆さん、ゲストステージのオファーの率直な感想をお聞かせください。

立：郡山のゲストステージに出たときは、JJFへ参加している方の世代がだいぶ変わっていることを金井くんから聞きました。

金：そうですね。10年前に出演したときは多分、JJF の存在を知ってはいたけど、参加したことはなかったんだよね。

立：随分昔も「JJF ってあるんだ。参加したらいいな」って話はしてたよね、劇団時代に。

金：今回オファーをもらったときに、松本開催ということで、私は松本に住んでいたの、正直うれしかったです。松本に住んでいて、しかも、松本で JJF が行われる。さらにその舞台に立てる。また、くるくるのメンバーと一緒にできるということで、これはスペシャルなことをやらなきゃいけないって思いが、すごくありましたね。あとは、郡山と全く同じことはできないなっていう感じで、成長しているところを見せなければいけない。それで今回、信州ユースサーカスのメンバーにも、一緒に出てみないかと相談して、ボリュームアップを図りました。

ま：ありがとうございます。JJF のゲストステージの演目の構成やこだわったところはありますか。

金：正直、くるくるシルク DX は技術的には大したことをしてないんですよ（笑）。ただ、特にくるくるシルクの 3 人はイベントの仕事や学校公演もよくやっていたり、そこに私も加わる回もあるんで、その中で何をやったら面白いかなといういろいろ考えました。特に 3 人でのハットジャグリングもやったことなかったし。

立：郡山ではミニステージでちょこっとやったけど、ゲストステージでは初めてでしたね。

金：それと、今回はユースメンバーが加わるっていうので、くるくるシルクは、どちらかというと、普段は関東圏で、ユースは松本なんで、距離があって、一緒に練習する機会がないんですよ。間に入っているのは私だけなので、そこをどうやって合わせようかと相談しながらやりました。あと、遠隔でどうやって練習しようかってことで、映像を使いながら、みんなの演技の中で、ここなら入れるかなって想定しながらやりました。あと、これまでユースがやっているワークショップにくるくるシルクが参加してくれたり、一緒に公演も出してもらったりはありました。でも、今回はそれでもやったことがないこともあったね。ピコピコハンマーとか、みんなではやったことなかったし。

ま：ピコピコハンマーは観客でも驚きが多かったです。最終的に合わせたのは直前ですか。

金：最終的に合わせたのは、JJFの金曜日だね。それまでは映像でやりとりしながら、つくっていききました。そういうのって、コロナ禍で遠隔でも一緒に練習できるノウハウがちょっとあって、松本の練習と関東の練習を映像でがっちゃんこさせてましたね。

ま：チームは集まるのが一番大変なところかと思います。今年のチャンピオンシップでも、優勝したpassmapが、大阪、大阪、東京、沖縄で離れていて。今年は4組のチームが出場したのもあってチームの機運が高まっているんで、遠隔でもできる話を皆さんから聞いたのはプラスだと思います。

藤：沖縄は大変だもんね。

立：でも、くるくるシルクDXは、もともとやっていたベースが結構あるよね。

ま：普段のパフォーマーとしての活動や大道芸と今回のゲストステージって、違う点ありますか。

高：ノリが全然、違いますよね。ゲストステージは、ちょっとなんかやると、うわーみたいに盛り上がって。いい思い出になりました。反応がいいよね。

藤：最初に僕らのボールの演技をやって、すごい反応が温かくて、それが結構うれしかったね。

高：そうだね。アットホーム。見てくれるんだ、みたいな。仲間？もしかして。

ま：仲間ですよ、だって。(笑)

金：アウェー感は無かったね、全然。

ミ：そうですね。

藤：見に来てる人は、自分らと一回りと二回りぐらい違うもんね。

高：お父さんに間違えられた。(笑)

藤：お父さん、下手したら、おじいちゃんぐらいになりますね。

ま：くるくるシルクさんのことは何となく知ってるけど、パフォーマンスを見たことない人も多かったと思います。バランスボールとかピコピコハンマーとか、出て来るたびに困惑、みたいな。(笑)

藤：困惑するよ。

一同：バナナ。(笑)

ま：バナナのシーンでは、松本バナナと言ってましたね。あれは本当にアドリブなんですかね。

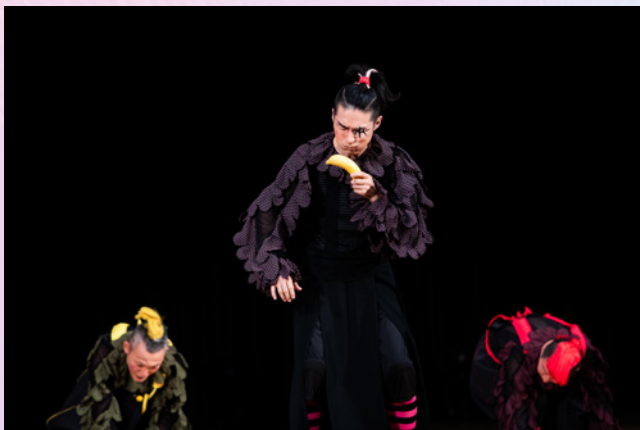
高：急に言い出すんですよ。

立：あれは、松本バナナでしょ？(笑)

金：信州でバナナ作ってます。あれ、信州バナナなんです。

立：パントマイムとか、あれもウケてた。

高：バナナとか、ああいうのは急に言ってます。それを受けて、また返して。



ま：客上げてるのも面白かったんですけど、ケントカイトのケントはなんで指名したんですか。

金：もともとは、客上げは入ってなかったよね。さくっと舞台上だけの演技で終わらせようかなって思ったんですけど、何となくJJFが始まる前から、いろいろイメージしていったときに、あえて客上げたほうが盛り上がるかもね、となって。

ま：めっちゃ盛り上がりました。ありがとうございます。

高：チャンピオンシップで賞を取った子たちを客上げしたら面白いんじゃない？みたいな話を、みんなですて。

金：チャンピオンの八神くんにしようかと思ってて。

藤：でも、「八神くんは、きょう来ているの？」って聞いたら、「名簿にない」って言われたから。

高：じゃあ、ケントカイトの2人。でも、ヘルメットが1個しかないからケントくん、みたいな。しかも、ケントカイトは、すごい昔、彼らが小学生の頃に同じテレビ番組で出演してるんですよ。覚えてんのかな、向こうは。

ま：あの2人、真面目なんで、すごい覚えてると思います。

金：私、カイトのほうにその話したら、覚えてましたよ。お正月のイベントで、東京タワーの真下でデカボールやって、ケントカイトがパッシングやって。お父さんが、「こいつらをすごいジャグラーにして、僕は将来、悠々自適に暮らすんだ」って言ってました。(笑)

高：すごいジャグラーになってますよね。

金：びっくりしました。



ま：ユースサーカスのメンバーも皆さん素晴らしいかったです。

金：毎年、ムーンナイトサーカスっていう市民参加のサーカス公演をやってるんですけど、ユースのメンバーも、ユースとしてではなく個人出演者として応募してオーディションを勝ち抜いている。

ま：すごい。

金：頑張ってくれてるね。

立：ユースのメンバーは、最初に会ったときは、全然ジャグリングなんか、やってなかったもんね。

金：そうね。みんなジャグリング初心者だった。

立：けど、すごいまくなって。ミノちゃんは、インスタで踊りながらジャグリングしてるのを、よく見てます。

金：タクム君は公演前に骨折しちゃって、ジャグリングどころじゃなかったから。

立：ナオミちゃんも、めちゃくちゃうまくなって。

高：だって、初めて会ったときは幼稚園だったっけ。

ミ：そうです。

金：モモちゃんもそうだね。

藤：もう、こんなやで。こんな。 (小さかったという手ぶり)

一同：笑い

金：そう。ナオミちゃんは、その後ぐらいいちちょっと来てて、当時よ、まつもとジャグリングクラブのほうに遊びに来ててみたいなの感じのメンバーでしたね、この3人は、ジャグリングクラブの場所で、鬼ごっこしてたみたいなのが最初だったね。

ま：でも、大きな舞台で堂々とされてて、すごかったです。せっかくなので、ユースサーカスの皆さんにも、ゲストステージに出演した感想を聞きたいです。

金：面白おかしく言ってください。

ミ：いや、難しいです。(笑) 私たちもチャンピオンシップを見てたんですけど、ものすごくレベルが高くて、その後だったんで、なおさら私たちの技をゲストステージで見せていいのかなっていうのは、すごい思ってる。いつもの公演とは、また違う緊張があったんですけど、でも、いざ出てみると、見てくださってる方たちがすごい温かくて驚いたし感動しました。

モ：お客さんのリアクションがいいっていうか、海外の人がいる前で発表したのが初めてで、やる前は緊張したけど、リアクションしてくれたおかげで、やってるときは楽しくて。あとピコピコハンマーのパスが練習のときは1回も成功してなくて焦ってたんですけど、本番は成功して。

立：本番だって、何も落としてなかったよ、パスのときね。

金：練習では成功しても、舞台リハーサルで通すと失敗が必ずあったのが、本番は成功した。

ま：すごい、本番に強い。

ナ：1人だと心細いなってところがあったんですけど、こんなに人数がいると、少し失敗してもフォローとかしてもらえて、そういうので元気づけられて勇気が出て、みんなの前で元気よくできたのかも。

タ：最初は楽しもうっていう心で。

ま：一番真面目な子でした。(笑)

立：一番大人だよ……

タ：頑張ってると思って、舞台上立ってやり始めたら楽しくなって、ミスすることもあんまりなくて、よかった。

ま：良かったです。皆さんのビジュアルポイのパートがあったと思うんですけど、リハーサルのときに、もう少しビジュアルポイの絵を改善したほうがいいかも、みたいな話になって、本番では写真がすごい、めっちゃいい感じに撮れて。

立：JJF って出たとき、お客さんが「おお」って。

ま：こういう感じでした。(撮影班の撮った写真を見せる)

一同：すごい。

ま：皆さんのポイがめっちゃきれいで、軌道もきれいだし。JJF2025 って出た瞬間に、めっちゃ客席が熱い。ジャグラーってビジュアルポイを見たら、なにか映るかもみたいな期待があると思うんですけど、その期待通り、盛り上がってました。

金：本当ですか。ありがとうございます。最初は、このTシャツのカモシカを入れてたんですけど、見えなさ過ぎて。

ま：カモシカは、ちょっと難しそうですね。

藤：なんか袖から見たらウサギかな？ なんやろうと思ったね。(笑)

金：シンプルに「JJF2025」にしましたが、結果良かったと思います。

ま：写真を撮ったスタッフのみーさんも「めっちゃきれいになってよかった」って喜んでました。

金：これ、撮影するほうも、それなりに知識ないと撮れないから。さすがJJFならではのですね。いつも難しいんですよね、撮影してもらうと。

ま：ありがとうございます。



クロ助 (以下、ク)：JJF 自体への感想があれば、お聞かせ願えないでしょうか。

立：郡山でやったときよりも、参加者が親しみやすくなってる感じがしたよね。

金：昨日もしゃべってたんですけど、JJF が歴史を重ねていって、ジャグラーたちもいろんな世代が成長していって、前は郡山のときの記憶でいくと、当時はもうちょっと大学生のサークル単位で固まってる感じがしたんですよね。でも、今は道具単位だったり、オープンにみんな楽しんでたりとか、あと今は海外勢も多いじゃないですか。

ク：そうですね。今年は、広報チームが情報発信に力を入れたこともあると思います。特に海外勢が多かったと思います。

金：海外勢が多いと、雰囲気もすごくオープンな感じになるというか、ちゃんとJJF が世界とつながってるっていう感じがして、それこそ海外のジャグリングフェスティバルとかに近づいてる感じがしましたね、雰囲気。

立：そうだね。

金：ユースのみんなは、なんかありますか？昔は新体操の練習で来てた体育館が、こんなふうになっちゃった。

ま：地元ですもんね。

ミ：私たちも、さっき2人でクラブパス練習してたんですけど、初めましての人から声を掛けてもらって、7本とか、いろいろ。今まであんまりちゃんと練習したことなかった技とかを、すごい丁寧に教えてもらって。数十分だったけど、すごい上達して。オープンに話し掛けてきてくれて、すごい楽しかったし、いいな、JJF 楽しいなって思いました。

ま：ありがとうございます。皆さんが楽しいなって思ってた来てくれたりとかするのが、運営としても一番うれしいですね。

ク：そういう言葉を聞けて私も非常にうれしいです。あとは、10年前に比べると社会人になっても纏まっている方が増えています。何度も参加して慣れている経験者が多いことも、親しみやすさが出ている一因なのかもしれませんね。

ま：ライフステージが変わって、結婚されて、お子さんを連れて来てもらっちゃう方も増えてますね。

金：チャンピオンシップも、お母さんがいたもんね。

藤：ジャグリング自体が、どんどん技術的なコミュニケーションツールとして広がってきたから、これだけ間口が広がって、例えば、こういう場所が、さっき言ったように、クラブを通して初めましてって言って、それを通して仲良く上についてんのかなって。

ま：クラブパッシングが2人以上じゃないとできないんで、話し掛けたりとか、みんな優しいし、みんなパッシングやろうみたいな、囲い込もうとしてますね。(笑)

ま：チャンピオンシップの感想も是非お伺いしたいです。

立：デビルスティックとか作ってる工房の、きそは工房さんのことを存じ上げなかったの、より技の特殊なテクニックとか、やりやすいように道具を作っているのが驚きました。

ま：そうですね。きそは工房さんは、3D プリンター等でオリジナルで道具を作られています。チャンピオンシップ出場者も愛用されている方が多くて、今年も、デビルスティックの森澤さんも、MagicHours も使ってたし。

ク：怜利くんの使っているシガーボックスもそうですね。

ま：シガーボックスも今までだったらナランハとか海外から直接輸入するのが主だったと思うんですけど、ここ何年かで発展してますね。

ク：そうですね。きそは工房に限らず、JJF の物販ブースも今回9店舗あって、その中でオリジナル道具を作っている所も多いですし、今回、『JUGGZINE』という雑誌を作っている所もありますし、ものづくりという観点でも、どんどんジャグリングが進化しているのは感じます。

金：そうですね。きそは工房のデビルスティックに触らせてもらったときに、プラスチックじゃん、みたいな感じが、ずるくない？っていうか。やりやすくなった分、多くの人が参加できたり、これだったらデビルスティックはやってもいいかもって思わせる道具になってたりとかはあるかな。あとは10年前の郡山のチャンピオンシップの話をする、そのときはもうちょっとサークル単位で応援してるとか、学生の大会のノリがあったような感じがしたんですけど、今は長年続けてこれた方がまた出てきたりとか、やっと出てきましたみたいな人もいて、幅の広さ、層の広がりをすごい感じましたね。いろんな世代がいて、昔、大学のサークルでやってたんだけど、今は現役でやってる人が誰もいなくても一人で来れるみたいなメンバーもいたりするじゃないですか。何となく JJF の会場に来れば知り合いのいたりとか、道具でつながってるとか、それは、チャンピオンシップ行っても、つながりがあるから来れるっていうか。あとは地元の人でも興味を持って見に来てくれる人がいましたね。

ク：そうですね。今回は長野県民割チケットを作ったり、実行委員長のおかしーさんや広報チームが宣伝を頑張ってくれたこともあり、多くの地元の方にも参加していただけたと思います。

ま：松本市のコンベンションセンターが協力してくださったりとか、キッセイ文化ホールで、当日券の問い合わせもあったと聞いてます。新聞やラジオの取材など、長野で開催するからこそその取り組みは、今年ありました。

立：ゲストステージとかも結構、一般の人は入ってるよね。

金：私も知り合いから「サイトを見ただけでチケットが売り切れてる」って言われて、当日券を紹介しました。全然ジャグリングに関係ない人からも連絡が来てたんで、興味を持ってくれる人はまだ発掘できそうだなって感じはしましたね。それこそ、ユースサーカスのメンバーの親御さんとかは、ちょっとジャグリングに興味があったり、子どもと昔は練習会へ来ていたけれども、そんなに普段、練習してるメンバーではないよね。きっと松本で開催されたことで、親御さんもかなり驚いてるっていうか、実際こんなに人が集まって、すごいイベントなんだって感じてくれたと思うんですけど、どうですか。

ミ：すごいって言っていました。

ま：東京以外での JJF 開催に対して、もっと地方でやってほしいとか、JJF に対して、なんか希望はありますか。東京より、自分の地元のほうが行きやすいって人は多いのかなって思うんですけど。

ミ：それは確かにありますね。特に、私たちみたいに中高生とか、小学生は、なんだから東京開催だと、今まで JJF に行ったことなかったし。地元でやると、せっかくだったら行こうっていう気にもなるなと思います。

金：地方でやるのがすごくいいと思うのは、きっと観光もできるからだと思いません。松本って、周りに山があって自然が豊富だったり、あとは松本城とか、文化的な建造物とかいろいろあって、バズって、外国人観光客が、2年ぐらいでめちゃめちゃ増えたんですよね。それで面白かったのが、松本市に姫路市役所の人が出向で来てたんすよ。私、去年いろいろお世話になった松本市の文化担当の方が「実は私、姫路市役所の者なんです」っておっしゃって、パフォーマンスの話をして「JJF 知ってます？」って聞いたら、「そんなのあるんですね」って返ってきて。お城つながりで姫路城も有名だけど、松本城のほうが国際的にバズっちゃったんすよね、インスタで。姫路が負けたみたいな感じで、勝った松本のほうに、いろいろ、「お互いにお城文化をどうするか学び合いましょう」って言って交流してたらいいんです。

ま：それは面白いです。

金：そうなんですよ。だから、JJF はお城がある所でやっても面白くない？と思うし。

高：経済効果がね。

藤：観光も含め。観光ツアー付きチケット、バックツアーみたいな。

金：外国人ジャグラー向けにいいんじゃないっすか。城とジャグリング。

立：ヨーロッパとかは逆にどうなの？

金：ヨーロッパは巨大な場所が必要なので、コンベンションセンターも、おっきな所が。EJC も野外巨大音楽フェスじゃないけど、お酒を飲んで、ヒッピー的な雰囲気とか、文化とつながっているところがありますよね。ちっちゃなジャグリングフェスティバルとかでも、キャンプ場でやったりとか。日本の JJF も、アウトドアも関わってきたら面白いだろうなと思ったりしますけどね。

藤：雨とか降ったら大変だね。台風とか。

金：あんまりキャンプするジャグラーっていないんすかね、日本って。

立：屋外ならファイヤー関係の人が結構来そうだね。

ま：ファイヤーは体育館だとできないですもんね。

ク：それこそ、海外の方からは、「深夜に体育館へ入れないか？」とか、「この中で寝泊まりできないか？」などはよく聞かれますね。

金：そういうキャンプサイトもあるよって、情報としてあってもいいのかもしれないですね。

ク：実行委員会に意見として挙げておきます。

ま：最後に活動の展望や、JJF に対するコメントをお願いします。

金：私は、引き続き松本でジャグリングの普及と、まつもとジャグリングクラブ、信州ユースサーカス、そして、くるくるシルクも含め、いろんな、別な場所から来るジャグラーとか、接点になれるような活動をしていきます。真面目な答えて、すいませんね。

藤：健康第一。

ま：重みが。(笑)

高：そうだ。

立：そう。いつ、誰が、みたいな。

藤：「あれ？くるくる1人、減った？」とかね。

立：金井くんは松本で、自分で広げてやってるけど、僕は東京で。練馬は練習場所が少ないから、誰か練馬を盛り上げてほしい。

高：今、体育館で言ったら「誰か練馬で練習やりませんか」って。(笑)

ま：今回のインタビューは終了いたします。ありがとうございました。

一同：ありがとうございました。

インタビュアー：まゆこ、クロ助

ワークショップ一覧



1日目 9月13日

種類	ワークショップ名	講師名
実技、座学	スマホでかんたん！SNS用ジャグ動画撮影&編集	ヤスナリ
実技	サディスティック入門	ヤマショウ
実技、座談会	新道具の使い方を考えよう	トラヨシ
実技	クラブマニピュレーション	Marvin Ong

2日目 9月14日

種類	ワークショップ名	講師名
実技	「筒けん」をやってみよう！	TIME
実技	「例のあの技・状態」に名前を付けてみよう	わざお
実技、座学	バータックス操作向上4	はが
座談会	練習を効率化するツールを教え合おう(教えて下さい)	トミタヒカル
座談会	Women's jugglers meeting in JJF	Jasmine
実技	技の作り方WS	ゴリラ
座談会	第1回 ジャグリングソフト発表会	加藤邦道
実技	リアルばやしの質問箱	ばやし
実技	ジャグリングで遊ぼう	ぐるくん
実技	ダボの色変え講座	セッペン
実技	ディアボロのスラックトリックと応用	よっすい〜

3日目 9月15日

種類	ワークショップ名	講師名
実技	道具の演技に活かせるパントマイム	くるくるシルクDX
座談会	ジャグリングの指導とコーチングについて	工藤正景
実技	クラブトラップとトラップカスケード	オンニ・トイヴォネン
座学、座談会	ジャグリングの構成・魅せ方	花田充
座学	ジャグラーのための身体操作講座~カッコいいお辞儀をするために~	せぶしおん

ゲストワークショップ



ジャグリングの指導とコーチングについて：工藤正景



クラブトラップとトラップカスケード：オンニ・トイヴォネン



道具の演技に活かせるパントマイム：くるくるシルク DX
(金井ケイスケ、立川真也、高橋徹、藤居克文)

Juggling Carnival in JJF2025

開催日時：2日目 15:00～17:00

開催場所：WSエリア1,2

りゅーじ



宮田直人



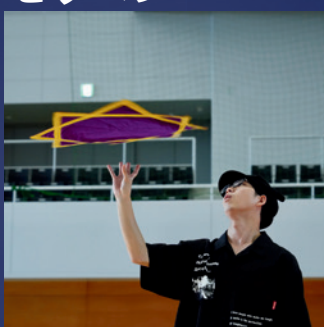
くる



ユウキ



セツペン



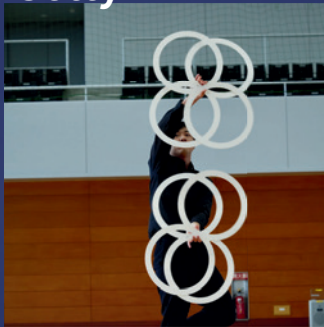
よってい



トラヨシ



Getty



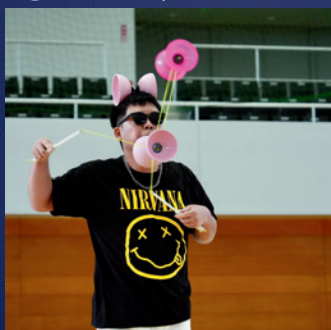
ゆうさく



らいか



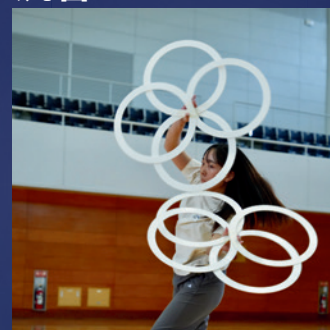
しんたく



笑パス



流香



くるけん



utm



EXTREME JUGGLING BATTLE

開催日時 JJF3 日目
(2025年9月15日) 15:00-17:00
会場 WS エリア 1,2
協力 jugmap

入賞者



第2位 おかだ



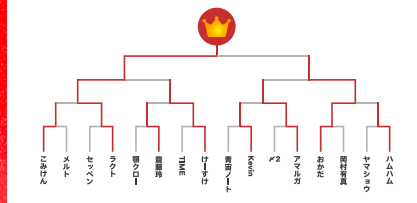
第1位 ラクト



第3位 アマルガ



トーナメント結果



松本は美しく豊かな水をたくわえた町であり、街中にも井戸・湧水が多く存在しています。
JJF2025では、松本の水を楽しめる特別企画「まつもと水巡り in JJF2025〜クリアボトルを持って、松本の水巡りを楽しもう！〜」が実施されました。

本記事では、編集部員が町中で見つけた湧水スポットをご紹介します！



▼蔵の井戸(中町)

手押しのポンプ井戸があります。



▲深志の湧水(松本駅前)



▲日の出の井戸(イオンモール横)



▲日の出の泉薬祖水(薬祖神社横)

球体型の井戸は縁起が良いそうです。

▼クリアボトルと企画景品ステッカー

ボトルにはTシャツと同じカモシカ、ステッカーはJJFブランディングロゴがあしらわれています。



ナワテ通りにはカエル大明神が祀られています。

まつもと水巡り散歩



エンデュランス

(1位のみ、敬称略)

7ボールカスケード	: Mike Moore	4シガーダイヤモンドループ	: ラクト
5リングカスケード	: みっちえる	DIウィンドミル	: ナーリィ
5クラブカスケード	: カイト	バータックスのインフィニティ	: なかむ〜
3ポイカスケード (投げ方自由)	: Jorge	デュアルプロペラ	: きたかぜ
5ボールカスケード	: 柴田光之進	3シガーレインボーループ	: シガ男
3リング肩パタ	: どい	3フラワーリバースカスケード	: やたべ
7クラブパッシング	: passmap	3皿カスケード	: なるこー(Naluco)
片手フィッシュテール	: 尾納宗仁	3ディアボロハイトス	: なかむ〜
3ボールバッククロス	: ケント	3シガーランナー	: 恭々
3クラブバッククロス	: ケント	インテグラルD	: 山本孝
ハンドバウンズ	: Mike Moore	デュアルフィッシュテイル	: クラタ クミ
バランス (お題付き)	: クラタ クミ	ランナー (道具指定なし)	: ハムハム



出展者紹介

JUGGZINE
 jugmap
 PM Juggling
 RADFACTOR
 Todoroki Electronics
 きぞは工房
 じゃぐとら@ジャグリングショップ
 株式会社筒けん
 日本ディアボロ協会



JJF2025 ロゴデザイン 制作：高坂 梓



【制作者コメント】

デザインを担当いたしました、高坂です。

「ジャグリングをするカモシカ」をメインに、松本から望む北アルプスとライチョウを配し、ジャグリング×信州要素をふんだんに盛り込みました！

色彩には特にこだわり、アルプスや温泉は寒色系で、クラブは暖色系の高彩度に仕上げることで、静と動のコントラストを際立たせました。

最上部のクラブには市花ツツジの赤を、ボールには市木アカマツの緑を、カモシカの目には北斎ブルーを用い、松本らしさ×日本の伝統色×スポーティーを融合させたデザインを目指しています。

実際にJJFにもお邪魔し、会場の熱気を肌で感じました。

ワークショップやカーニバルで、道具を落としても最後まで応援し合い、心から楽しんでいる参加者の皆様。ゲストステージは、まるで漫画の世界のような大技の連続！大きなどよめきと拍手がとても印象に残っています。

「ジャグリングの世界は技だけでなく、人の温かさでできているんだな」と胸が熱くなりました。

こんなに素晴らしい世界に出会えて本当に光栄です。

信州でJJF2025が開催されたこと、運営に携わられた皆様、参加者の皆様、すべての皆様に改めて感謝申し上げます。

JJFブランディングロゴ 制作：高坂 梓



これまでJJFのロゴは、各年度ごとに個別に制作しておりましたが、今後の一貫したブランディングを図るため、2025年に新たにJJFブランディングロゴを制作いたしました。

ロゴにあしらわれたラインはジャグリングオブジェクトの軌道を表現しています。「F」の文字には日本ジャグリング協会のロゴにも使用されているクラブが用いられています。

Shall We Juggle?編集部紹介

SWJ編集部員



まゆこ(編集長)



クロ助



みー



アルジェ

JJF2025当日撮影スタッフ



4oli



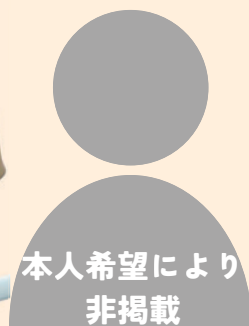
だーうえ



つみき



なっとう



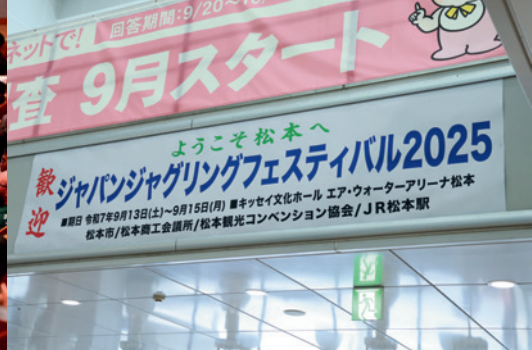
iwana



編集部員募集

SWJは編集部員を募集中です。
作業内容は企画・原稿依頼と
回収・撮影・編集・校正など、
ネット中心の活動です。
年齢・性別・ジャグリング能力
不問です。
ご興味ある方は下記にご連絡を
お願いします。

shallwejuggle.edit@gmail.com



編集後記

SWJ第67号をお読みいただきありがとうございます。
本号では前号よりも多くの写真を掲載できるように心がけ、
さらに魅力的にお伝えできるような構成といたしました。
また、JJF2025ではSWJ編集部として湧水スポットの写真撮影や
SNSリアルタイム実況といったオリジナル企画も実施できました！
特に、リアルタイム実況は会場へ足を運べない方にも
JJFの雰囲気味わっていただけたようでうれしく思います。

個人的な話をしますと、新しい公開体制になってから1年ほど経ち、
記事の作成・編集にもやっと慣れてきました。
初期に作成した記事と現在のものを比べると
少しずつですが編集レベルが上がってきている気がします……！
(いかがでしょうか？)

また、こんな頼りない私と一緒に活動してくれている
編集部員の皆様には大変感謝しております。
今後も編集部の体制を強化し、様々な企画を実施していけるように
邁進してまいりますのでご支援のほどよろしくお願いいたします。

次回のJJF2026は久しぶりの東京開催！
なんとオリセンのコンビニはローソンになったそうですよ！
自分は今から参宮橋近辺の美味しいご飯を探しています。

——「ジャグリングより団子」だよな

SWJ編集長 まゆこ



JJF2025 実行委員・スタッフ

●実行委員会

実行委員長	柏倉 優大
副実行委員長・CS 事務局長	小野口 貴仁
アドバイザー	世良 京太
本部チーフ	クロ助
本部サブチーフ	nora
劇場チーフ	徳川 亮祐
劇場サブチーフ	棚橋 悠
劇場サブチーフ	鈴木 奏多 (アスリク)
イベントチーフ	伊藤 康晃
イベントサブチーフ	菅沼 千紗
イベントサブチーフ	熊澤 菜月
イベントサブチーフ	富永 陽太
広報チーフ	深津 哲也
広報サブチーフ	田村 尚輝
協賛	石須 滉大
Web	尾納 宗仁
海外対応	青木 直哉

●本部グループ

当日受付スタッフ

受付スタッフ	りゅーじ
受付スタッフ	黒珈琲
受付スタッフ	竜半
受付スタッフ	杉山 恒太
受付スタッフ	みーれ
設営スタッフ	難波 健
設営スタッフ	葦沢 優虎
設営スタッフ	さんそ
設営スタッフ	倉科 潤大
設営スタッフ	やすべー
設営スタッフ	小澤 花歩
設営スタッフ	早乙女 由樹

英語サポートスタッフ

英語サポートスタッフ	土居 将大
英語サポートスタッフ	デービッド・カールソン

救護班

救護班	古谷 正幸 (まさやん)
救護班	安江 将貴
救護班	高橋 惣成
救護班	浅井 一樹
救護班	red
救護班	いなりや
救護班	けーすけ
救護班	古瀬 紗佳

CS 事務局

CS 事務局	山本 翔太
CS 事務局	小長井 将悟

●劇場グループ

舞台監督	竹内 正則
舞台監督補佐	ryodan
照明	小林舞台照明
音響	株式会社ファーストサウンド
CS 司会	福島 千紘
GS 司会	しえりー
客席スタッフ	高橋 惣成
客席スタッフ	立石翼 (ズボン)
客席スタッフ	道田 義和
客席スタッフ	柊
客席スタッフ	岡村 有真
客席スタッフ	早川 翔太
客席スタッフ	細川 大熙
客席スタッフ	nico
客席スタッフ	十川 大輝
客席スタッフ	清水 陸玖

オンライン配信

ライブ配信対応	岡本 晃樹 (Room Kids)
ライブ配信対応	山田 タカマサ (Room Kids)
ライブ配信対応	関矢 昌宏 (Room Kids)
ライブ配信対応	井手 優介 (Room Kids)
同時視聴録配信	三珠さくまる

●イベントグループ

サイモンセッツ	じゃぐたく
エクストリームジャグリング	うず
エクストリームジャグリング	青木 直哉
Juggling Carnival in JJF	岡田 樹也
Juggling Carnival in JJF	けんちゃん
Juggling Carnival in JJF	めいこ
エンデュランス	矢口 純
エンデュランス	アマルガ
1年生交流会/2年生交流会	Nino
1年生交流会/2年生交流会	中川真織子
クラブバレー/クラブコンバット	いしかわ

Shall We Juggle?

SWJ 編集長	まゆこ
SWJ 編集部	クロ助
SWJ 編集部	アルジェ
SWJ 編集部	みー
SWJ 当日撮影スタッフ	上田一
SWJ 当日撮影スタッフ	4oli
SWJ 当日撮影スタッフ	なっとう
SWJ 当日撮影スタッフ	つみき
SWJ 当日撮影スタッフ	iwana

●広報協力

ロゴデザイン	高坂 梓
--------	------

JJF 紹介動画

撮影・編集	Nexus (上田・堀越)
-------	---------------

主催：日本ジャグリング協会

理事長	松岡 寿典
理事	小野口 貴仁
理事	後藤 猛文
監事	小出 博史
事務局長	クロ助
事務局	星野 充宏

次回JJF予告

TOKYO

JJF

JJF 2026 10.10»12

国立オリンピック記念青少年総合センター（東京・渋谷）

A large crowd of people, mostly young adults, are gathered in a gymnasium, throwing a large amount of colorful confetti and streamers into the air. The scene is festive and celebratory. The gymnasium has a wooden floor and bleachers in the background. The confetti includes various shapes like circles, stars, and streamers in many colors like red, blue, green, yellow, and purple.

制作：くまがいみさと